

歴史的文書の名称	普賢岳山体の推移(自衛隊提供)
番号	10-000005
作成・取得所属名	不明
作成(完結)年度	不明
媒体の種類	紙
即日閲覧の可否	可
内容	・1990年11月から1995年2月まで続いた雲仙普賢岳の噴火活動による、普賢岳山体の推移をまとめた資料(自衛隊提供)

《溶岩ドームの成長過程(#1~#6)》

溶岩ドームの成長過程 (#1~#6)

第1ドーム



第1ドーム (H3. 5. 20~H3. 6. 3)
地獄峠火口に出現した溶岩ドームは次第に東側(木無川方向)へとせり出す。

第2ドーム



第2ドーム (H3. 6. 4~H3. 7下旬)
火砕流を繰り返しながら東側(木無川方向)へと成長を続けた。

第3ドーム



第3ドーム (H3. 8. 14~H3. 9上旬)
山頂部分に湧き出し口をもった第3ドームは、北東側(千本木方向)への崩落も続いた。

第4ドーム



第4ドーム (H3. 9. 16~H3. 11中旬)
9月15日深江町にも大火砕流による被害を及ぼした後、約1年3ヶ月余りにわたり成長、崩落を繰り返した。山頂部分第5ドーム。北東側に第4ドームが出現、最大約500m幅に成長。

第5ドーム



第5ドーム (H3. 11. 24~H5. 2中旬)
約1年3ヶ月余りにわたり成長、崩落を繰り返した。山頂部分第5ドーム。

第6ドーム



第6ドーム (H3. 12. 3~H4. 6下旬)
山頂部分が第5ドームで覆われた際、今後は南東側(深江町方向)に新しい第6ドームが出現した。

《溶岩ドームの成長過程(#7~#12)》

溶岩ドームの成長過程 (#7~#12)

第7ドーム



第7ドーム (H4. 3. 24~H4. 8中旬)
第6ドームより更に上部から南東側(深江町方向)に出現、赤松谷の浸食を次第に埋め尽くした。

第8ドーム



第8ドーム (H4. 8. 11~H4. 11. 20)
第6、第7ドームと同じ南東側で山頂部に近い所から出現、赤松谷は完全に埋め尽くされ深江町は、土石流に對する心配も増大した。

第9ドーム



第9ドーム (H4. 12. 3~H4. 12. 23)
わずか20日余りの成長で止まった第9ドームも南東側(深江町方向)に出現した。

第10ドーム



第10ドーム (H5. 2. 4~H5. 3. 17)
第3、第5ドームを覆い、最大直径約300m、高さ約100mに、山頂部に「悲鳴岩」をのせた様な不安定な型に成長。

第11ドーム



第11ドーム (H5. 3. 17~H5. 11上旬)
再び水無川方向(東側)の斜面に出現。第10ドームの崩壊と、併せ、崩落の回数を増大させている。

第12ドーム



第12ドーム (H6. 1. 15~現在)
溶岩降起部から水蒸気と噴煙を吐出させており南西及び北西方向へ小規模な崩落を生じさせている。